

第41回 和漢医薬学会学術大会（千葉大学） 基礎と臨床の橋渡しの実践—二刀流を極める—

2024年8月24日 15:35-17:35

シンポジウム

「漢方薬のがん治療におけるアートとサイエンス」

ラウンドテーブルディスカッションと総括

ラウンドテーブルディスカッション

漢方の臨床において伝統医学の継承を重視しづぎると、基礎研究や臨床研究のデータを隨証治療に取り入れることが、伝統医学の破壊になるとの認識もある。



張仲景は「博采衆方：その時代にある治療法を広く集めて最善の治療を産み出すべきである」と主張している。

一般的に「漢方薬をがんの治療に用いる。」ことは、現実的でないと思われている。



例えば10～15年前には免疫の分野から、がん治療薬が開発されるとは思われていなかったが、今では免疫チェックポイント阻害剤が広く使われるようになった。



ブレイクスルーがあれば、漢方薬を治療目的で使えるようになる可能性もある。

種々のがん治療に際しての生体内反応は複雑ではあるが、把握できる症状の類型をもとにして、漢方医学の手法で対応できる可能性は大きい。

治療効果は、現状ではRCTでの効果判定が基準になっているが、RCT以外にも有用な統計手段が存在することを認識すべきである。

臨床医の先生方は多忙であると思いますが、有効な症例を論文化（可能であれば英文）し、基礎研究者が基礎研究の根拠として引用できるようにしてほしい。



症例報告の集積による有効性の示唆（無効例が報告されないという「パブリケーション・バイアス」を念頭においた症例集積が必要）



将来の公知申請や治験につながる可能性がある。

総 括

がん支持医療に漢方薬を併用して標準治療を完遂することが求められる時代になった。

がん治療薬と漢方薬の併用の有効性と安全性の基礎的・臨床的エビデンスが求められており、
本大会のテーマである「基礎と臨床の橋渡しの実践」をする場が必要である。

和漢医薬学会は「基礎と臨床の橋渡しの実践」をする場として、十分な役割を果たせる学会へと成長することが求められており、それと同時に「TKM誌を通じて世界に漢方を発信する」という使命を有している。

『傷寒論』の序文で「勤求古訓、博采衆方（勤めて古訓に求め、博く衆方を采（と）って）」と記述があり、張仲景 先生（傷寒雜病論の著者）は「**その時代にある治療法を広く集めて最善の治療を産み出すべきである。**」と主張された。

伝統医学の継承は重要であるが、時代の進歩を取り入れる柔軟性も必要である。

基礎的・臨床的エビデンスをもとに、**その時代のベストの治療を患者さんに届けることは、医療関係者の責務である。**

Kampo medicine is an art, based on tradition and science.